

膠原病としてのエリテマトーデス、鞏皮症の 戦前戦後の推移について

岡山大学医学部皮膚科泌尿器科教室（主任：大村順一教授）

古堀寛明・岸本 明・佐々木八郎
世良昌穂・国原角三

〔昭和34年3月18日受稿〕

所謂 Collagen disease なる概念は Sellye 副腎皮質症候群説の台頭と共に近年脚光を浴びた感がある。ことに皮膚科領域に於ては一連の汎発性皮膚疾患群は再整理されつつある現状に於て、Klemperer の Collagen disease なる疾患群について皮膚科の立場から今一度その立論にふりかえってみよう。

急性伝染病、急性中毒症の中には何れの器官にも特異な、或は顕著な変化の見出されない事がある。これは Morgani の一定の疾患は一定の器官に宿ると云うテーゼに合はないのである。反之播種状エリテマトーデスでは全身各所の器官、即ち皮膚、心臓、腎臓等に一様に顕著な変化が起つており、heterogene の器官の膠原組織に線維素様変性 fibrinoid degeneration が生じている。Klemperer は全身膠原組織を一系統と見做し、これを場として特有な変化の生ずるものを Collagen disease とした。然してエリテマトーデス同様の広汎な膠原線維変化は汎発性鞏皮症にも見られるが、この場合は結締組織の増殖及び硬化を主とし線維素様変性と膠原組織硬化症とは膠原病の2つの異なる相の表現であると Klemperer は述べている。ここで問題となるのは臨床症状の軽重と膠原組織変化の夫れとが必ずしも一致しない事実である。最後に重要な事は Klemperer の線維素様変性を Rössle²⁾、Jaeger がそれをなしたようにアレルギー乃至パテルギーの組織表現と見做す事を排し、Klinge³⁾ が実験的ヒペルギー性炎症に線維素様変性を認めたとしても逆は必ずしも真でないとしている。又一方伊東によるとエリテマトーデスの病機を細菌性アレルギーと推論する立場に於て Milian の Biotropisme の概念によつて解説しており膠原線維系統乃至血管の病変がアレルギー説に於て問題となつてゐる。Selye⁴⁾ は動物に種々の Stress を与える事により実験的膠原病類似の疾患を作り、膠原病が下垂体—副腎系のバランスの失調により生ずる適応の疾患であると考えた適応症候

群なる概念を展開した。

かくの如く Collagen disease なる疾患は Klemperer 以来、その病因、概念について判然とせず議論百出し、個々の疾患間に於てもある一部は相重合し、他の一部は相違している点もある。

一般に皮膚科領域に於て所謂 Collagen disease なる疾患にエリテマトーデス、汎発性鞏皮症、皮膚筋炎、結節性動脈周囲炎があげられているが、前2者は臨床上日常しばしば見られる所であり、この2者について次の観点より眺めてみた。即ち Collagen disease の原因は単純なる factor でなく、いろいろの factor が組み合つて生ずるのであり、われわれは第2次世界大戦と云う社会情勢、生活環境を考慮に入れて戦前、戦後の各10年間についてエリテマトーデス、汎発性鞏皮症の発生頻度並びにその病相の如何に変転しているか統計的に観察を加えてみた。

I エリテマトーデスについて

昭和11年以降昭和30年に到る20年間にわたつて岡山大学医学部皮膚科外来を訪れた患者につき昭和20年迄の10年間を戦前群とし、それ以後昭和30年迄の10年間を戦後群としてエリテマトーデスの統計的観察を加えた。

1. 症例数

昭和11年以降20年間の皮膚科外来患者合計総数（泌尿器科疾患を除外）53,713例でエリテマトーデス症例177例にして、その比率は0.33%であり、これを他大学の報告と比較してみるに佐野⁷⁾ (0.53%) より低少であるが中野⁸⁾ (0.37%) とほぼ同一であり、桜根⁹⁾ (0.26%)、稻葉¹⁰⁾ (0.28%)、山内¹¹⁾ (0.22%)、鎌田¹²⁾ (0.18%) より高率であつた。もつとも、既発表の中、戦後の短期間の統計では高率であり、長期間のもの程低率となつており、われわれも戦前、戦後に分けてみるに戦前外来総数19,326例中49例、0.25%であり、これは昭和10年竹内¹³⁾ の

報告せる千葉大0.27%, 東大0.3%に比し大体同率であるに戦後群では外来総数34,387例中128例(0.37%)であつて明らかに戦前よりも高率であり, 著明な増加を来しており, 桜根, 鎌田, 中野等の報告と同一傾向にある。

2. 年次の消長

次に年度別に眺めると, 第1表に示す如く昭和11

第1表 症例数並びに年次の消長

年 度	患者数	外 来 患者数	百分率	
昭和11	3	1,293	0.23%	戦 前 群
12	3	1,712	0.18	患者数 49 外来患者数 19,326 百分率 0.25%
13	3	1,722	0.17	
14	5	2,030	0.25	
15	7	1,862	0.38	
16	3	2,048	0.15	0.25%
17	6	2,175	0.28	
18	5	1,978	0.25	
19	2	2,108	0.09	
20	2	2,398	0.08	戦 後 群
21	5	2,644	0.15	
22	10	2,404	0.42	
23	7	2,568	0.27	
24	3	3,081	0.10	患者数 128 外来患者数 34,387 百分率 0.37%
25	10	3,461	0.29	
26	13	3,335	0.39	
27	19	3,789	0.50	
28	21	4,494	0.47	0.46
29	20	4,370	0.46	
30	20	4,241	0.47	
計	177	53,713	0.33	

年より支那事変, 太平洋戦争期にかけて増加の傾向ありて, 昭和14年0.25%, 昭和15年0.38%である。この事は第一次世界大戦時ドイツにてエリテマトーデスの患者が増したと Martenstein⁵⁾, Müller, Hoffmann が述べている事実, 又荒川⁴⁾, 稻葉¹⁰⁾の統計と同じ傾向にあり, 戦争下の恵まれざる生活環境と云うものは本疾患発生の一因子に含まれる事は首肯されるのである。ついで昭和20年0.083%と著明な低下を示して来るが, これは終戦時の社会的混乱な要素が入っているためと思われる。次に戦後群では昭和25年0.26%と増加を来し以後著明な増加となり昭和27年では0.5%と激増している。これを本邦の報告に比するに桜根⁹⁾, 佐野⁷⁾の報告は短期

間で一定の傾向はないが, 中野⁸⁾, 鎌田の如き長期間の統計では凡てわれわれと同一傾向を示している。殊に鎌田¹²⁾はこの激増の原因を化膿性疾患群の年次の消長及びスルホンアミド剤, 抗生物質の出現との関係につき注目し focal infection による感染アレルギーを以て説明をなし, 伊藤¹³⁾は本症の戦後増加現象を化学療法剤乃至抗生物質による病原菌のなま殺し状態を惹起せしめたのではないかと推論している。

3. 性別, 年令

第2表に示す如く本疾患177例中男子60例, 女子117例にして女性に多く男女比は1:1.95であり, 桜

第2表 性別並びに年令別

年 令	性 別		戦 前		戦 後	
	男	女	男	女	男	女
0~10	0	0	0	0	0	0
11~20	4	21	1	3	3	18
21~30	22	41	4	14	18	27
31~40	18	33	8	7	10	26
41~50	9	14	4	5	5	9
51~60	5	7	0	2	5	5
61以上	2	1	1	0	1	1
計	60	117	18	31	42	86

根(1:3.62)北村¹⁶⁾(1:3.45)の如き最近短期間の統計では女性に高率に発生しているが, 鎌田¹²⁾(1:1.3)中野(1:1.45)山内(1:1.48)の如き長期間の統計に比すると女性に多い成績である。これを戦前, 戦後に分けてみるに, 戦前男18例, 女31例であり, その男女比は1:1.72, 戦後では男42例, 女86例でその男女比は1:2.05となり戦後はやや女性に多く発生している。

発病年令別のうち最高年令は男子67才, 女子64才であり, 最低年令は男子19才, 女子14才で全症例を通じ14才より67才迄の間に罹患している。これを年令層別にみると第2表に示す如く男女共20才台に最も多く男22例女41例あり, ついで30才台となり男18例, 女33例である。これを戦前, 戦後に分けてみるに戦前では男子は30才台に最も多く8例, ついで20才台40才台共に4例となつており, 女子は20才台に最も多く14例, ついで30才台の7例である。戦後では男女共20才台に最も多く男18例, 女27例であり, ついで30才台の順で男10例, 女26例である。

4. 発病, 来院, 増悪月別

本疾患の季節的消長の特長としては太陽光線の影響による所大にして, われわれは発病時期, 外来初診時, 増悪時期の三つに分けてカルテ記載の明らかなものについて調査したが第3表の如き結果を得た。

第3表 月 別 分 布

区分 月別	発 病 数			来 院 数			増 悪 数		
	戦前	戦後	計	戦前	戦後	計	戦前	戦後	計
1月	1	7	8	2	6	8	2	1	3
2	1	8	9	2	10	12	1	0	1
3	1	3	4	4	12	16	0	3	3
4	4	9	13	4	11	15	4	3	7
5	1	5	6	2	11	13	1	6	7
6	4	9	13	8	16	24	4	7	11
7	1	8	9	10	13	23	3	10	13
8	7	10	17	6	17	23	9	18	27
9	1	4	5	3	19	22	1	5	6
10	2	2	4	5	4	9	0	1	1
11	1	3	4	2	7	9	0	1	1
12	2	5	7	1	2	3	3	2	5

まず発病月別をみるに, 一年を通じ8月が一番多く17例, ついで6月, 4月の13例であり, 1年を通じて4月より8月中に発病するものの99例中58例で半数以上に春より夏にかけて発病し, 戦前, 戦後を通じて同じ傾向であつた。発病月別は主に患者の間診により知る所であり, いささか正確ならざる点もあるので外来初診時期についてみるに6月の24例, 7月, 8月の各23例, 9月の22例, 3月の16例, 4月の15例であり, やはり春より夏にかけて来院するもの多く, 発病時より約1ヶ月間づれて来院の傾向が窺われる。戦前, 戦後に分けてこれをみるにやはり同じ傾向にある。次に問診による増悪時期並に治療中にもかかわらず増悪するものについて調査したが, 8月に増悪せるもの最も多く27例, ついで7月の13例, 6月の11例の順になつている。増悪時期を戦前, 戦後と比較してみるに何れも6月より8月にかけて殊に8月に多いのである。

以上3点よりみても太陽光線のつよい春より夏にかけて変動多く, 本症が光線過敏性皮膚疾患である事が窺われるのである。

5. 皮疹の部位的関係

本症の発生部位として初発部位と好発部位に分けて観察した。まず初発部位としては頬部に多く84例,

鼻部33例, 口唇5例の順となつており軀幹にはほとんど発生しない。これを戦前, 戦後に分けてみるに第4表の如く全く同じ傾向にあり相違は認められなかつた。

第4表 部 位 的 関 係

区分 部位	初 発 部 位			好 発 部 位		
	総数	戦前	戦後	総数	戦前	戦後
頬	84	17	67	125	26	99
鼻	33	9	24	75	21	54
口 唇	5	1	4	33	7	26
額	3	0	3	28	11	17
耳	2	0	2	18	10	8
頭	2	0	2	16	5	11
頤	2	0	2	7	0	7
上 肢	2	0	2	21	6	15
下 肢	0	0	0	15	5	10
胸	1	0	1	14	6	8
背	0	0	0	4	0	4

好発部位として同一患者に2ヶ所以上発生しているものは別個に計算しその統計をとつてみたが, 初発部位と大体同じ傾向にあり, 頬部に一番多く125例, ついで鼻部75例, 口唇34例, 額28例となつている。戦前, 戦後と比較するに同一傾向にあり, 本症の露出部位に多く発生し, 殊に顔面の尖端部に生ずる事は内外文献と同一であり, 本症の光線過敏性も首肯される所である。

6. 月経との関係

本症は女性に多く, しかも妊娠可能年令に頻発する事より, 又妊娠との関係についてもいろいろと報告されており, 女性ホルモンと何らかの関係ありと云はれてをる。即ち妊娠による悪化例 (Loederer) 及び怪快例 (Fordyce) もあり, 流産による悪化例 (Hachez) と怪快例 (Lowenberg), 又出産後の発

第5表 月 経 と の 関 係

区分 月経	戦 前	戦 後	計
月 経 正 順	4	18	22
月 経 不 順	5	11	16
不 妊 症	0	3	3
流 産 後 発 生	0	3	3
産 後 発 生	0	3	3
妊 娠 中 発 生	1	0	1
婦人科的手術後	1	2	3

病(藤井¹⁷⁾)等あり、又卵巣摘出後発生した例(Pringle)もある。われわれも月経との関係について調査した所、第5表の如き結果を得た。罹患女性38例中月経正順22例、月経不順16例ありて不順なるもの42.1%もあり、また妊娠との関係をみるに不妊症3例、流産後発生したもの3例、産後発生せるもの1例、妊娠中発生したもの1例、子宮外妊娠にて手術後発生せし2例、卵巣嚢腫にて卵巣摘出後発生せし1例あるは誠に興味深く本症が女性ホルモンと深い関係にある事も首肯されるのである。

7. 病 型

本疾患には急性型及び慢性型等諸種の型がみられ、症状にも甚しい相違があるが初発疹は悉く同一であ

第6表 病 型 分 類

病 型	区 分		計
	戦前	戦後	
急性播種状エリテマトーデス	3	6	9
亜急性播種状エリテマトーデス	2	0	2
慢性播種状エリテマトーデス	2	7	9
慢性円板状エリテマトーデス	42	115	157
計	49	128	177

り、病理組織学的には質的に異同を認めなく、急性型の慢性移行或いは逆に慢性型の急性移行ありて甚だ複雑である。その分類も各人各様であり、Michelson, 北村, Dogos, 伊藤等の分類あるが、われわれはこれらを考慮に入れて急性播種状エリテマトーデス、亜急性播種状エリテマトーデス、慢性播種状エリテマトーデス及び慢性円板状エリテマトーデスの4型に分ち第6表に示す如き結果を得た。全症例177例中急性播種状エリテマトーデス9例、亜急性播種状エリテマトーデス9例にして、播種状エリテマトーデスとしては11.3%にすぎず、慢性円板状エリテマトーデスは非常に多く157例88.7%である。

8. 血沈値, 蛋白尿について

次に病型別に血沈値, 蛋白尿についてみたが第7, 8表の如き結果を得た。まず血沈値では急性播種状エリテマトーデス1時間値72 mm, 2時間値91 mm で高度の促進あり、慢性播種状エリテマトーデス1時間値50 mm 前後2時間値100 mm 前後であり、慢性円板状エリテマトーデス1時間値7~30 mm の間にあり2時間値は50 mm 前後である。即ち急性型に、また播種状になるにつれて血沈値は促進している。次に蛋白尿について病型別にみるに

第7表 血 沈 値

病 型	区 分	
	1 時間	2 時間
慢性円板状エリテマトーデス	7	13
	12	28
	17	41
	23	48
	28	36
	29	56
	30	67
慢性播種状エリテマトーデス	54	98
	58	106
急性播種状エリテマトーデス	72	91

第8表 蛋 白 尿

病 型	区 分		陽 性		陰 性	
	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後
急性播種状エリテマトーデス	3	6	0	0	0	0
亜急性播種状エリテマトーデス	0	0	0	0	0	0
慢性播種状エリテマトーデス	0	1	0	3	0	3
慢性円板状エリテマトーデス	1	2	9	58	9	58
計			13	70		

急性播種状エリテマトーデス9例全部陽性に出ており、慢性円板状エリテマトーデスでは検査せし70例中3例に陽性に出ておるに過ぎない。

9. 梅毒血清反応について

本疾患54例に梅毒血清反応を施行した所、第9表

第9表 梅 毒 血 清 反 応

病 型	区 分		陽 性		陰 性	
	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後
急性播種状エリテマトーデス	0	0	2	2	0	0
亜急性播種状エリテマトーデス	0	0	1	1	0	0
慢性播種状エリテマトーデス	0	0	1	1	0	0
慢性円板状エリテマトーデス	2	2	21	21	2	2
計			4	100		

に示す如く慢性円板状エリテマトーデス4例に梅毒血清反応陽性をみた。本症と梅毒との関係は殆ど今日では省みるものもないが僅に先天梅毒にのみ発症の母地としての意義があるようである。

10. ツベルクリン反応について

本症と結核との関係は Lupus の名称がついている事からも想像でき、Darier は結核疹に編入した程である。又凡ゆる方面から結核の検索が行はれ、

第10表 ツベルクリン反応

病 型	区 分		陽 性		陰 性	
	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後
急性播種状エリテマトーデス	2	2	1	0		
亜急性播種状エリテマトーデス	1	0	1	0		
慢性播種状エリテマトーデス	0	2	0	0		
慢性円板状エリテマトーデス	13	35	0	13		
計	55		15			

本症患者に結核病巣の存する事等報告せられている。われわれは70例にツベルクリン反応を施行し、55例に陽性をみたが、これをもつて直ちに本症の結核説を云々する事は出来難く伊東は巣感染としての意義ありと云っている。

11. 治療成績について

本症の成因についての究明と共に治療方式も変遷し、大別して第11表に示す如き方法ありて、その効果を求めてみた。

第11表 治 療 成 績

	光線療法		砒素剤		金剤		蒼鉛剤		計		抗生物質	内服分泌法
	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後	戦前	戦後		
治癒	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
著効	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	1
軽快	0	1	2	5	1	4	0	4	3	14	15	11
不変	7	1	5	0	6	5	3	2	21	8	1	3
増悪	2	3	0	0	0	0	0	1	2	4	1	0
不明	14	2	0	0	2	4	1	6	17	12	8	0
計	23	7	7	5	9	13	4	14	43	39	28	16

1) 光線療法

紫外線、レントゲン線の照射等があるが、30例につき軽快1例、かえって増悪せるもの5例ありて今日では殆どかへりみられなくなっている。

2) 砒素剤古くから使用せられ Fowler 液の如き無機物のもの、ソラルソンの如き有機化合物等、多々あるが12例に使用し軽快7例を得た。

3) 金 剤

戦前最も實用された一方法でありトリファール、ゾルガナル等があり22例に使用し5例に有効であ

った。

4) 蒼鉛剤

本剤の応用は梅毒を合併しているエリテマトーデス患者に用いて効を認めたものに始まり、現在迄諸家の報告あるも一般に副作用の少い点が有利である。18例に使用し著効1例、軽快4例を得た。

以上4者は戦前より主に使用せられている治療であるが、この同一方法による治療成績を戦前、戦後に分けてみるに戦前43例中、軽快3例にすぎず、戦後の39例中、著効1例、軽快14例であり、治療成績も向上している。これは治療回数にも関係するが、又医薬品の改良進歩によるものと思われる。

ついで戦後画期的な薬剤として登場したものが抗生物質ペニシリンであり、副腎皮質ホルモンである。本症もその恩恵に浴するものの一つである。

5) 抗生物質

ペニシリンを28例に使用し治癒1例、著効2例、軽快15例即ち有効18例、64.3%を得た。なかんづく急性型では極めて顕著な効果を認めた。

6) 内分泌療法

戦後副腎皮質ホルモン剤の出現により、本症にも全身療法、局所療法として使用せられ劇的な効果ありとの報告も多々あり、われわれは16例に使用し治癒1例、著効1例、軽快11例即ち有効13例、81.2%と云う結果を得た。特に急性型に対して全身投与で著明な効果を得たものがある。

以上戦前、戦後のエリテマトーデスの治療成績を比較するに第11表の如く、戦前43例中軽快3例にすぎず、これに対して戦後では83例中、治癒2例、著効4例、軽快40例にして有効率55.4%であり、治療成績は非常に好転しているのである。

II 汎 発 性 皰 皮 症

1. 症例数

昭和11年より昭和30年の20年間の汎発性皰皮症は15例にして外来患者百分率は0.028%であり、九大(0.048%)、金沢医大(0.057%)に比し低少である。これを戦前、戦後に分けてみるに戦前7例、0.036%であり、戦後8例、0.023%で本症発生頻度は戦前においてやや大である(第12表)

2. 年次の消長

年度別にみるに第12表に示す如く、昭和11年より5年間は全くなく、昭和16年以降30年に亘り1年間約1~2例にして大体均等に分布しており、エリテマトーデスの如き、戦前戦後の著明な差は全く見ら

第12表 症例数並びに年次の消長

年 度	患 者 数	年 度	患 者 数
昭和11	—	昭和21	1
12	—	22	—
13	—	23	—
14	—	24	—
15	—	25	2
16	2	26	1
17	1	27	1
18	2	28	1
19	1	29	—
20	1	30	2

れなかった。

3. 性別並に年令分布

第13表に示す如く、15例中男子7例、女子8例にして男女の比には変りはない。三浦⁹⁾は女性にやや

第13表 性別並に年令分布

年 令	戦 前		戦 後	
	男	女	男	女
11~20	—	—	—	—
21~30	—	3	1	2
31~40	1	2	—	1
41~50	1	—	3	—
51~60	—	—	1	—
計	2	5	5	3

多く69%を占めており、樋口⁸⁾は女子に多く男子の約3倍ありと報告している。これを戦前、戦後に分けてみるに、戦前7例中女子5例、男子2例にして男女比は1:2.5であり女性に多く、戦後では8例中男子5例、女子3例にして男女比は1:0.6である。

次に発病年令では最高59才、最低21才であり、年令層別に分けると男子では40才台に多く4例であり、女子では20才台5例、ついで30才台3例となつている。戦前、戦後に分けてみるに、男子は何れも40才台に、女子では20才台ついで30才台に多く、戦前、戦後の差は全く見られない。

4. 罹患部位、色素沈着、自覚症状

まず罹患部位として第14表の如く上肢の冒されているもの最も多く13例、ついで顔面11例、ついで軀幹、下肢となつており戦前、戦後は全く同一傾向にあつた。

一般に皰皮症は暗褐色の色素沈着を局所に来すが、

第14表 a 罹患部位

部位	区 分	戦 前	戦 後
	顔	5	6
上	胸	5	4
	背	5	5
下	肢	7	6
	肢	3	5

第14表 b 色素沈着

群	区 分	戦 前	戦 後
	有	4	7
不	無	0	0
	明	3	1

第14表 c レイノー氏症候群

群	区 分	戦 前	戦 後
	陽 性	4	4
陰 性		3	4

カルテ記載の明確なるもの11例中凡てに見られた。

自覚症状として殊に著明なものはレイノー氏症候群であり、15例中8例にあり、大体に発病初期に訴へているようである。

5. 月経との関係

女性7例中月経の正順なもの2例、月経不順なもの4例あり、又妊娠中に発病せしもの1例あり、本

第15表 月経との関係

月 経	区 分	戦 前	戦 後
	順	1	1
妊 娠 中	不 順	2	2
		1	—

邦文献中にも月経との関係について記載せしものに官野²⁰⁾、松井²¹⁾等があるが、月経不順、妊娠等に関係して発生せるものありて本症の性腺機能不全が窺はれるのである。

6. ツベルクリン反応並に梅毒血清反応について

結核と本症とは判然とせる因果関係はなく、内分泌腺が結核におかされ、これと密接な関係にある自律神経に影響を及して発生を促すのであると云はれている。三浦は42例中14例にツベルクリン反応陽性であり、樋口は3分の1に陽性を見たと報告してい

第16表 a ツベルクリン反応

反応	区分	戦 前	戦 後
陽 性		4	4
陰 性		—	—

第16表 b 梅毒血清反応

反応	区分	戦 前	戦 後
陽 性		—	—
陰 性		4	4

る。われわれは8例に施行し凡て陽性であつた。

次に本症と梅毒との関係は、官野²⁴⁾は24例中5例、中野²²⁾は31例中6例の梅毒血清反応陽性を認め、又三浦⁹⁾の駆梅毒療法により奏功した報告あるも、梅毒は本症の原因ではなくて主に内分泌腺の梅毒性変化が本症の発生を促すものと云はれている。われわれは8例に施行して凡て陰性であつた。

7. 植物性神経系

呉²³⁾は脊髄後根中に皮膚、筋、骨、関節などの栄養を司る副交感神経のある事を発表し、山県²⁴⁾

第17表 自律神経機能検査

検査法	戦 前		戦 後	
	陽 性	陰 性	陽 性	陰 性
アドレナリン	—	3	—	1
ピロカルピン	3	—	1	—
アトロピン	—	—	—	1

は本疾患において身体各部の末梢神経中の副交感神経線維に変化を認めている如く、本症の成因と自律神経系とは重要な関係にある。この中、交感神経緊張説、副交感神経緊張説とあつて一定しないが、一般に副交感神経緊張を示す場合が多く、われわれも4例中4例共アドレナリン試験、アトロピン試験は陰性であるが、ピロカルピン試験は全て陽性であつた。

8. 治療成績

本症の治療として主に内分泌療法及び、これと密接な関係にある自律神経剤が用いられているが、本症の成因の複雑であることに関連して治療方法もまちまちである。

1) 甲状腺剤

本症がしばしばバセドウ氏病等甲状腺の病変を合併し、基礎代謝にも変動ある事より甲状腺機能不全

第18表 治療成績

	甲状腺剤	下垂体前葉製剤	副腎皮質製剤	自律神経剤
治癒	—	—	—	—
著効	—	—	—	—
軽快	3	2	1	1
不変	5	2	1	1
増悪	—	—	—	—
不明	2	1	1	—
計	10	5	3	2

が考えられ、古くより甲状腺製剤が使用されているが、効果も区々であり、官野²⁰⁾、中野²²⁾、矢野²⁵⁾等の如く効果を認めたもの、又千原²⁶⁾、木下²⁷⁾の如く無効或は増悪例もある。われわれは10例に使用し軽快3例を得た。

2) 下垂体製剤

Strümpell が本症と下垂体、殊に前葉との関係について報告して以来、トルコ鞍像の異常を記載しているもの多くあり、太田²⁸⁾は下垂体製剤の使用は本症に必須なものであると発表し、田中²⁹⁾等の有効例が見られる。われわれは5例に使用し軽快2例を得た。

3) 副腎皮質製剤

本症は膠原病と云う概念より副腎皮質ホルモン製剤が使用されているが、その成績もまちまちであり、われわれも3例に使用し軽快1例を得た。

4) 自律神経剤

呉²³⁾は副交感神経の萎縮を認めた事よりピロカルピンの使用により著効を得た多数の報告をなし、多くの追試報告もあるが、われわれは2例に使用し軽快1例を得た。

以上鞏皮症の治療成績を総括してみるに15例中、軽快7例、有効率46.7%であり治療に抗して増悪せしものは認められなかつた。

さて、われわれの経験した上記臨床所見より、所謂 Collagen disease なる疾患を眺めるに、エリテマトーデスと鞏皮症の間には膠原組織の fibrinoid degeneration と云う共通の場はあるにしても、他面非常な差異の認められる点もあり、エリテマトーデスの発生は社会環境特に戦争と云うものに、より大きな影響をうけるものであり、且四季を通じて春、夏に多いと云う季節的影響をうけ、これは主に本症の光線過敏性に大いに関係あるものと思われる。これに反して汎発性鞏皮症は戦前、戦後を通じ

てその発生率において大した変化もなく、季節的影響も全く認められないのである。又一面発病年齢ではエリテマトーデス、鞏皮症共に20才台より40才台の青壮年層に多く、特に女性では月経不順或いは妊娠に関係して妊娠中、産後、流産により発生せる症例の両疾患に見られる点はまことに興味ある所にして内分泌的因子が両者共に存するものと思われるのである。

さはあれ、これらエリテマトーデスといい、又鞏皮症といい、共に身体諸臓器の機能と密接な関係を

有し、否、その皮膚機能は身体諸臓器の機能脱落或は失調を表現するものである疾患においては、その病像の変遷と共に本態の究明により、治療も変化し適確となるものである。ことに膠原病の概念の下に、これら疾患を眺める時幾多興味深いものがある。

稿を終るにあたり、御懇篤な御指導、御校閲を賜つた恩師大村教授に深甚な謝意を表します。

参 考 文 献

- 1) Klemperer, P, Pollack, A. D., and Baehr, G. J. A. M. A., 119, 331, 1942.
- 2) Rössle, R. Vischows Archiv., 288, 780, 1933.
- 3) Klimge, F. Ergeb. Path., 27, 1, 1933.
- 4) Seleye, H. Ach. path., 36, 19, 1943.
- 5) Martenstein. : Klin. Wschr., 1, 2235, 1922.
- 6) 伊藤 実 : 皮泌誌, 47巻, 115, 昭15.
- 7) 佐野栄春 : 臨皮泌, 8巻, 339, 昭29.
- 8) 中野 進 : 皮と泌, 18巻, 538, 昭31.
- 9) 桜根好之助 : 皮と泌, 17巻, 614, 昭30.
- 10) 稲葉 鑒 : 臨皮泌, 3巻, 177, 昭24.
- 11) 山内 玄 : 皮性誌, 56巻, 18, 昭21.
- 12) 鎌田修一 : 臨皮泌, 9巻, 65, 昭30.
- 13) 竹内 勝 : 皮と泌, 3巻, 257, 昭10.
- 14) 荒川忠良 : 臨皮泌, 1巻, 136, 昭22.
- 15) 伊藤 実 : 皮性誌, 64巻, 372, 昭29.
- 16) 北村包彦 : 臨皮泌, 3巻, 50, 昭24.
- 17) 藤井 覚 : 皮紀要, 17巻, 157, 昭6.
- 18) 樋口謙太郎 : 皮膚科全書, V, 1, 1.
- 19) 三浦 修 : 皮と泌, 7巻, 221, 昭14.
- 20) 官野英利 : 皮泌誌, 25巻, 903, 大14.
- 21) 松井捨一郎 : 東京医会誌, 37巻, 30, 大12.
- 22) 中野 操 : 治療処方, 14巻, 1186, 1527, 昭8.
- 23) 呉 健 : 東京医会誌, 39巻, 726, 大14.
- 24) 山県健二 : 東京医会誌, 46巻, 1535, 昭7.
- 25) 矢野満雄 : 皮と泌, 11巻, 11, 昭18.
- 26) 千原隆三 : 皮と泌, 4巻, 320, 昭11.
- 27) 木下直幹 : 岡医会誌 (臨床特輯), 53巻, 41, 昭16.
- 28) 太田正雄 : 治療誌, 5巻, 497, 昭10.
- 29) 田中一雄 : 皮泌誌, 38巻, 562, 昭10.
- 30) 原田 彰 : 皮性誌, 51巻, 279, 昭17.

Statistical Observations on Erythematodes and Scleroderma.

By

Hiroaki Kobori, Akira Kishimoto, Hachiro Sasaki,
Masuho Sera and Kakuzo Kuniyara.

From the Department of Dermatology & Urology, Okayama Medical School,
Okayama University, Okayama. (Director: O Prof. J. Omura)

Studies on clinical and statistical observations on collagen disease, erythematodes and scleroderma have been carried out over past 20 years from 1936 to 1955.

These skin diseases were found to have some important correlations of seasonal and endocrinological factors and recently seemed to become more increases.